

月刊

2011

6
月号

みんぱく

特集

骨から学ぶ 野林厚志
自然人類学者の奇妙なコタワリ 坂上和弘
メキシコの骸骨人形 中牧弘充
撒かれる骨灰は語る 金セツピヨル
発掘された人骨が博物館で展示されるまで 植田直見
骨が語るとき 川越道子

どこから来たの？
どこへ行くの？



昭和三十九年七月、横浜港を出帆したソ連の客船の中で、私は梅棹先生にはじめてお目にかかった。当時はナホトカ港に到着後、シベリア鉄道に乗り継ぎ、それから空便でモスクワに着いた。梅棹先生はそこで第七回国際人類学・民族学会議へ出席。私はウズベキスタンのサマルカンドへ向かった。

毎日のお会いしたのは、昭和四五年の日本万国博覧会で。私はお祭り広場で世界の祭りの制作・演出を担当。その地下では、梅棹先生も実現にかかわられた、仮面と神像約二六〇〇点による展示がおこなわれた。それが今日の国立民族学博物館の発点のひとつになった。

三年後の昭和四八年に、梅棹先生は日本写真家協会の入会審査を受けられた。資格審査の資料は、岩波写真文庫の『アフガニスタンの旅』『タイ』『インドシナの旅』の三冊で、日本の写真界に民族誌写真という分野をはじめて明示した。

国立民族学博物館が開館され、その友の会の機関誌として『季刊民族学』が創刊されたのは昭和五二年である。前年の昭和五一年に、学習研究社から『民族探検の旅』全八巻（編集長中城正堯）が出版された。全巻を日本の写真家が撮り、

プロフィール
大正10年中国大連市に生まれる。写真家。昭和25年に日本写真家協会創立者のひとりとして入会、現在名誉会員。世界の祭り・民族・民俗芸能の写真取材をおこない、現在にいたる。平成元年に紫綬褒章、平成7年に勳四等旭日小授章を受賞。おもな著書に、『日本の祭り歳時記』（講談社）、『日本の民俗（上・下）』（クレオ）、『折口信夫と古代を旅ゆく』（慶応義塾大学出版会）など。



梅棹忠夫先生と民族誌写真

はがひでお
芳賀日出男

梅棹先生が監修された。第一巻のオセアニア編では、ニューギニア東部にある高地の村々を大石芳野さんが通算六カ月滞在して撮影をしている。その中にメニヤミヤに暮らす先住民の女性が出産して、わが子のへソの緒を切る決定的瞬間の一枚がある。

昭和五六年、日本写真家協会は梅棹先生の講演会をおこなった。演題は「民族学者から見た写真」で、「写真の撮影なくして、民族学は成り立たない」と結論付けた。講話が終わると九四名の聴衆が駆け寄り、梅棹先生をかこんだ。その中の一人に大石芳野さんもいた。梅棹先生は異民族と生活を共にして信頼を得てから写した大石さんの作風に心を打たれたようだった。

昭和五七年、東京銀座のニコンサロンで個展「民族学者 梅棹忠夫の眼」を開催、アジアからヨーロッパまで四六六の写真を展示、全国七カ所を巡っておこなわれた。

平成六年には文化勲章を叙勲、日本写真家協会から名誉会員に推挙された。梅棹先生の没後、今年の三月三日から六月一日まで国立民族学博物館で第八回目の写真展が開催されている。この民族誌写真展は梅棹先生の分身として、今後も生き続けることであろう。

月刊
みんぱく
6月号目次

- | | |
|--|---|
| <p>1 エッセイ 千字文
梅棹忠夫先生と民族誌写真 芳賀 日出男</p> <p>2 特集 骨——どこから来たの？どこへ行くの？</p> <p>3 骨から学ぶ 野林 厚志</p> <p>4 自然人類学者の奇妙なコダワリ 坂上 和弘</p> <p>6 メキシコの骸骨人形 中牧 弘允
撒かれる骨灰は語る 金 セツピョル</p> <p>8 発掘された人骨が博物館で展示されるまで 植田 直見
骨が語るとき 川越 道子</p> <p>10 研究フォーラム
国を超えるグローバルな支援と包摂 陳 天璽</p> <p>12 みんなく Information</p> | <p>14 地球ミュージアム紀行
阪神淡路大震災の記憶をとどめる 野島断層保存館 久保 正敏</p> <p>15 みんなく 私の逸品
帆走カヌー チェエメニ号 阮 雲星</p> <p>16 散策と思索の径
ハワイ、沖縄、フィリピンの歴史が交錯する街 原 知章</p> <p>18 多文化をささえる人びと
母語で喜怒哀楽を 文化的背景に配慮した在日コリアン老人ホーム「故郷の家」 金 春男</p> <p>20 歳時世相篇
モンゴルのナーダム 小長谷 有紀</p> <p>22 フィールドで考える
漁業開発が残したもの 吉村 健司</p> <p>24 次号予告・編集後記</p> |
|--|---|

目鼻立ちや肌の色、肉や脂肪のつき方と違い、
日常生活において骨は隠れた存在である。
しかし人体の芯を支える骨をじっくり見据えると、

特集

骨

どこから来たの？
どこへ行くの？

〈我々はどこから来たのか、そしてどこへ行くのか〉という、

人間のアイデンティティの根源に辿り着く。

生の記憶、死の暗示、

そして生者と死者をつなぐ存在である骨。

骨に対する人類の思いは深い。

骨から学ぶ

野林厚志 民博研究戦略センター

進化の過程を骨に見る

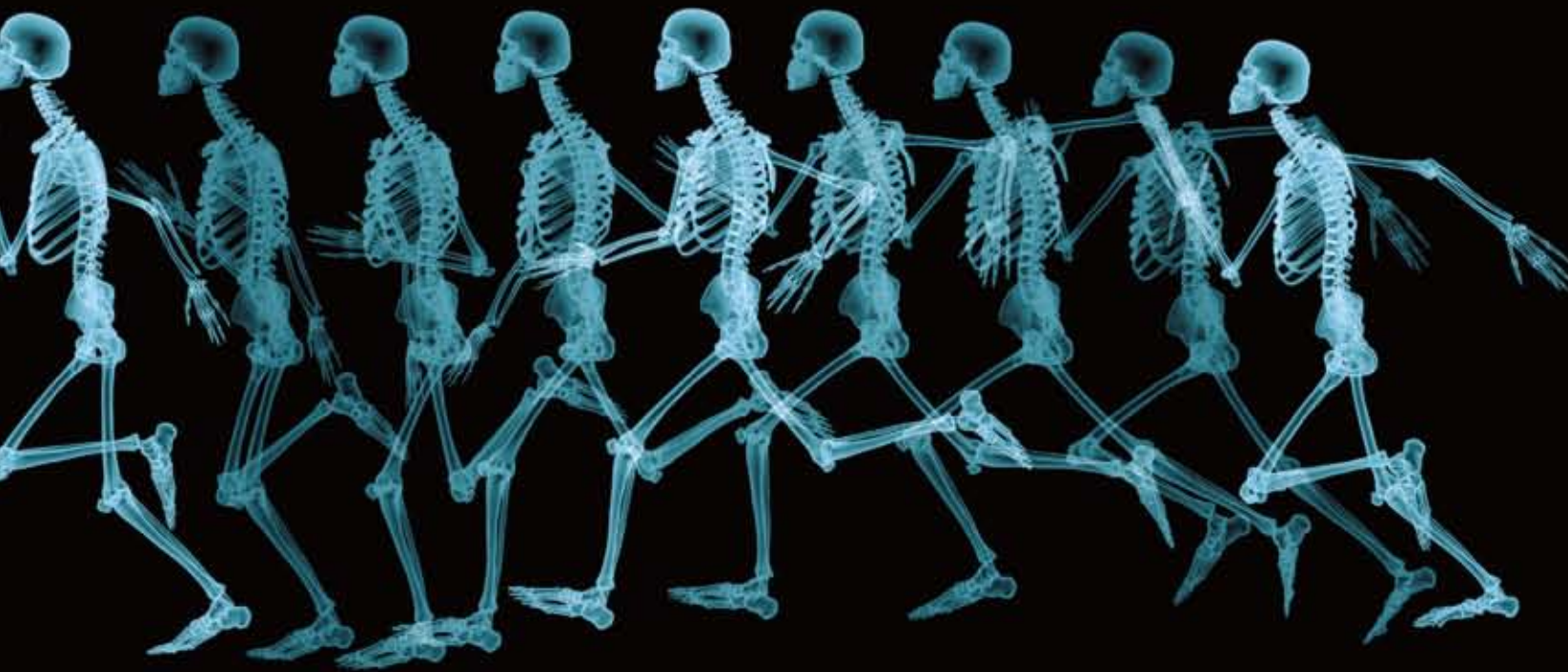
文化人類学や民族学と対をなす研究分野である自然人類学では、DNA分析による人類集団の進化の過程の解明が主流になりつつある。当初は生体からのDNAが分析対象だったが、最近では化石人骨からもDNAを取り出すことが可能となってきた。

たとえば、クロアチアで発掘された数万年前のネアンデルタール人の化石人骨のDNA分析の結果からは、そのDNAが現生人類やチンパンジーとはそれぞれ数パーセントの違いであることや、現在のヨーロッパ人ではなく中国やパプアニューギニアの人類集団と同一の配列をもつ領域が存在することまでも明らかにされてきた。

また、骨をCTスキャンで分析することでその内部構造を明らかにし、二足歩行の獲得や大脳が発達する過程を検証する研究や、骨に含まれる微量元素の分析に基づき食生活を復原して、当時の生業行動を推察する研究も今ではそうめずらしいものではなくなっている。

骨を見つめて人を知る

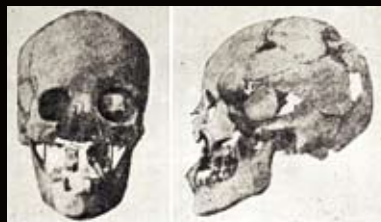
とはいっても、人骨の基本的な計測、神経や血管のおおっている穴の有無や形態の分析に基づいた自然人類学の伝統的



な研究手法が色あせたわけではない。こうした研究はデータを分析し、その結果を解釈して人類の進化や適応を論じることにとどまらない。骨を観察し、その質感を読み解くことは、その骨の持ち主の生前の姿を具体的にイメージさせるためには不可欠なのである。民博の元老を務めた自然人類学者の故鈴木尚東大名誉教授が石田三成の頭骨を評した「まったく武骨なところはみじんもなく、むしろ容貌は女性と見まごうほど端正で、智者にふさわしい静けさを感じられるのである。」の言を知れば、我々がテレビや映画で三成を演じる俳優を見る目も変わってくる。



石田三成像 (杉山丕氏所蔵)



石田三成の頭骨 (『骨』鈴木尚著 学生社より転載)

骨は物質的にはリン酸カルシウムのかたまりである。もともとは、海中にいた無脊椎動物が、その生存に不可欠なリン酸とカルシウムを体内に保持するために形成した器官で、時間を経て、動物のからだの支持体となり、運動機能の基盤器官となり、脳や内臓を保護するための構造体となっていったと解釈する生物学者は少なくない。

当初は調整器官にすぎなかった骨は個体の中心に居座る存在となり、やがて文化的な存在感を示すようになっていく。東アジアの各地では「父骨母肉」という



ことばが、父系社会のなかで個人の由来を説明する表現として用いられることがある。また、個体が死に、その肉体が朽ち果てていくなかで唯一残される骨は、個人が属していた家族や共同体によって遺骨として所有され、故人を通じてつながっていた人間たちの関係を維持させる役割を果たしていく。

いったこともあるようだが、遺された者たちが近親者の骨をいつまでも手元においたりする習慣をもった社会はあまり聞かない。死してもなお、個人のアイデンティティと履歴とが骨にぎざみこまれていくような感覚を人は覚え、それゆえに、人びとは生の証であった骨の存在にこだわり、ある程度の距離を骨に対して置いてきたのだ。骨はそれを手にする者にとつて、ものであるとわりきって扱ふことはできないだろう。骨から学び、骨を読み解く者が、骨に敬意を抱き、心をよせる所以である。

自然人類学者の奇妙なコダワリ

または彼らは如何にして怖がるのを止めて人骨を愛するようになったか

坂上和弘 国立科学博物館研究員

情報の宝庫

自然人類学は生物としての「人類」を研究対象としており、人類の「本質」「変異」、そして「由来」を明らかにすることを目的としている。方法としては軟部組織を扱う研究もあるが、多くの自然人類学者は「骨」を研究対象に用いている。その理由には「保存されやすい」こと、そして「情報量が多い」ことが挙げられている。

古代人の遺体は数多く発見されているが、皮膚や筋肉が残っている、つまり図1のようなミイラ状態の遺体は最古のもので約九千年前（南米チンチョーロ文化の「Acha man」）である。それに対してもっとも古い現生人類「ヘルト人（ホモ・サピエンス・イダルツ）」の化石はなんと約一六万年前のものである。現生人類よりも前の段階の祖先、いわゆる「猿人」や「原人」といったものの骨も数多く発見され、我々人類がどのような進化過程を経たのかを示す証拠となっている（図2）。

変化をつづける

また、一般に骨は硬く変化しにくいものだと思われているが、わたしたちの骨は新陳代謝を活発におこない、二年ほどで骨の全細胞は入れ替わっている。そのため、何を食べ、体をどう使ったかに応じて骨はその形を変化させている。いわば、両親から受け継いだ形質という「オーダーメイドの一品」を自分の使い方で「カスタマイズ」したものが、わたしたちの骨なのである。したがって、骨の形から、その人がどのような集団に属している

可能性が高いか、性別、死亡したときの年齢、身長、どのような体の使い方をしていたのかなどを推定することが可能となる。

たとえば、縄文時代人骨は現在 三千体ほど、弥生時代人骨は三千体ほど発見されている。これらの人骨を調査することで、縄文時代から弥生時代にかけて大きく変化した社会構造には、人の移動による影響も考えられることが明らかとなっている。彫りが深く小さい顔の縄文人と平坦で大きな顔をした弥生人（図3）では「オーダーメイド」の部分から大きく異なっている、つまり属している集団が異なっている可能性が高いことが、骨の形態をさまざまな方法で分析することで指摘されている。

骨を読む

こういった「骨を読む」ことは何も遠い過去を明らかにすることだけの手法ではない。自然人類学の手法を江戸時代や近代、さらには現代の人骨に適用することで、文献などで明らかになっていない情報を確認したり、海外における日本人戦没者の遺骨を鑑定し日本に帰還させる手助けをおこなったり、白骨死体を鑑定し犯罪捜査に貢献したりもしている。これほど機能的でありながら個性的であり、なおかつ「来し方」を科学的に考える根拠ともなる「骨」。まさにこれこそが、我々自然人類学者がコダワル理由である。



図1 日本のミイラ「即身仏」の御尊顔

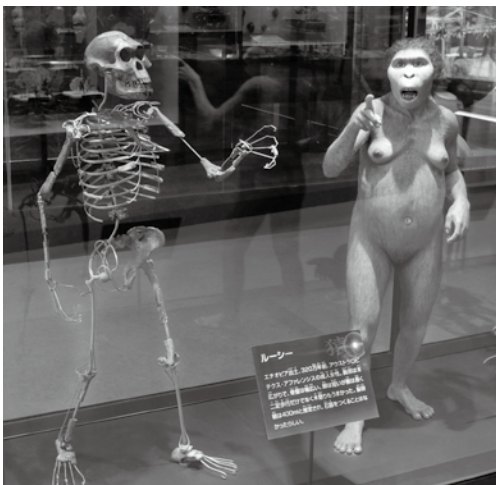


図2 約 350 万年前のアウストラロピテクス・アファレンシス（通称ルーシー）の骨格模型と生前の復元像。



図3 弥生時代人骨（左：土井ヶ浜遺跡出土、レプリカ）と縄文時代人骨（右：宮野貝塚出土）。縄文時代人は鼻根部が高く隆起し、四角い眼窩（がんか）、低い顔、平坦な歯の摩擦などの特徴をもつ

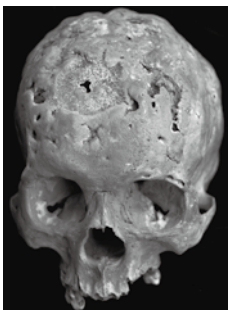


図4 江戸時代の梅毒にかかった人骨。前頭部に骨吸収像が見られる。当時大都市江戸では梅毒が非常に流行し、骨の状態から江戸在住成人の半数近くが梅毒であったと考えられている

※図2～4の資料はすべて、国立科学博物館所蔵

メキシコの 骸骨人形

中牧弘允 民俗民族文化研究所

メキシコの骸骨人形はユーモラスである。民博のアメリカ展示場の一角に陣取り、トランプ遊びに興じる骸骨たち。そこに不気味さはない。そのせいか、来館する子どもたちには絶大な人気をほこっている。今回の新構築では、ソンプレ口をかぶった楽士やミシンにむかう婦人もくわわり、いつそつにぎやかに

死者の日

メキシコでは一月二日の「死者の日」が近づくど街中が骸骨であふれかえる。骸骨人形の工芸品だけでなく、お菓子にまで骸骨の模様があしらわれる。砂糖菓子やチョコレートの髑髏が祭壇にそなえられ、友人たちにプレゼントされる。骸骨を飾ったり食べたりするのは、亡くなった人たちとの交流をはかるためである。

カトリック教会では一月一日が万聖節、つまりすべての聖人の日である。その翌日が万霊節、すなわちあらゆる死霊をまつる日である。この日には、日本のお盆のように死者が戻ってくるとかんが



祭壇にそなえられる骸骨の菓子 (撮影・鈴木紀)

えられている。現に、ブラジルの日系社会では「死者の日」のことを「ブラジル盆」とよびならわしている。

絆を保持する

仏教の「三界万霊」というかんがえかたは施餓鬼会の基調をなすものである。三界とは欲界、色界、無色界をさす。欲界とは肉体の制約をうける食欲や性欲の世界。色界とは欲界をはなれてもまだ物質(色)からは解放されていない世界である。そして無色界は肉体や物質から離脱した世界とされる。

ひるがえってメキシコの骸骨人形をみると、酒を飲み、音楽を楽しみ、遊びにも夢中である。姿こそ骸骨であるが、欲界の楽しさを依然つづけている。それな

らば、年に一回、現世に戻つてきてもおかしくはない。骸骨人形や骸骨菓子は死を想起させると同時に、死を身近なものとして受容させている。骸骨のアイテムは家族や親族、あるいは友人や知人たちが故人との関係を維持し、その絆を保持するための仲立ちとなっている。その点で、骸骨の存在はお盆の習俗を知る日本人にも了解可能である。

骨格への執着

だが、骸骨へのこだわりの程度となると、メキシコと日本、ひいてはキリスト教と仏教ではおおきな隔りがある。キリスト教には肉体の復活信仰があり、土葬が基本である。かたや仏教は解脱を旨とし、火葬をひろめてきた。仏舍利信仰や納骨の風習も往生や供養の観念とむすびつき、無色界が理想とされた。おのずから、骨格への執着はつすくなる。

浄土真宗の中興の祖、蓮如は御文のなかで「朝に紅顔、夕べに白骨」と記し、無常を強調した。一休も骸骨図や髑髏図を方便に禅を説いたといわれている。骸骨は無常を悟るよすがとして比類なきアイテムであった。

もちろん遺骨には日本人にもつよいこだわりがある。大阪の一心寺のように、無数の遺骨で仏像をつくる例もないわけではない。しかし、ローマの通称「骸骨寺」にみられるような、多数の髑髏をならべた墓地空間は皆無である。



酒場でトランプに興じる骸骨人形 H0131672他

メキシコの先住民もこうしたキリスト教の復活信仰にとまどつたにちがいない。しかし、死者との絆を死後までも継続させるといふ点において、骸骨の存在は貴重だった。とりわけ先住民のおおいメキシコ市以南の地域にこの風習がひろまっていることも無縁ではないであろう。

撒かれる骨灰は語る

金セツピヨル 総合研究大学院大学博士後期課程

海や川、山などに散骨する葬法である自然葬は、もともと、新しい家族形態の出現や、ライフスタイル、宗教意識の変容、そして自然回帰への渴望などを背景として生まれた。万物をあらわす「自然」と、本来備わっている性質としての「自然」というふたつの意味が同時に含まれるこの自然



木のまわりに撒かれた骨灰

葬は、既存の価値観に頼らず、自分なりの生と死を営んでいこうとする人びとに魅力的な死生観を提示する。早くに知人の死を経験していたわたしにとつても、自然葬は新鮮な響きとして感じられた。そして、わたしと同じような感覚をもっている人たちが、どのように死を受け入れようとするかについて興味を抱くようになった。

当時韓国では、自然葬ははじまつたばかりであり、ドイツや北ヨーロッパとならんで、一五年ほど早くはじまつていた日本の事例がよく紹介されていた。大学で日本語と文化人類学を学んだわたしは、学位取得を兼ねて日本に留学し、自然葬に関する研究をすすめたいと考えようになった。

来日後、わたしは、自然葬を最初に提唱したNPO法人「葬送の自由をすすめる会」の協力をえて、自然葬をおこなおうとする人たちのライフヒストリー調査をおこなってきた。調査をすすめるなか

で、さまざまな人びとと出会ったが、そのなかには、第二次世界大戦の経験者や、六〇年代や七〇年代の学生運動に積極的に参加した人たちが、そしてその経験と自然葬の選択を関連つける人たちが多く含まれていた。

戦争を経験し、国から規制を強いられてきた彼らは、一人の人間として組織という枠のなかに押し込められたくないという気持ちが強く、墓という枠にも、死んでなお押し込められたくないという気持ちを抱いているという。それまで無意識に日本を戦争の加害者としてのみ想定していたわたしに、そのような彼らの発言は衝撃であった。葬送儀礼という大事な場面に寄り添い、調査をしながら交流を深めるなかで、一個人として彼らの人生に共感するようになったのである。

一方、学生運動に参加した一人は、裸で生まれ、裸で死んでいくのが自然の姿であり、死ぬときは、みな平等に、対等な立場で死にたいと語る。しかし、彼らも今では社会というシステムのなかで経済的に一定の成功をおさめ、運動に参加した当時のように、既存の体制に異を唱えつつつけてきたわけではなかった。自然葬を選択することは、そんな彼らの抱くわだかまりを昇華する手だてだったのかもしれない。

撒かれる骨灰には人の生の哀愁、そして望みが込められている。これからもわたしはさまざまな骨と、そこに宿っているたくさんの話に出会うだろう。そしてその話に耳を傾けることは、わたし自身が生と死を受け止めていく過程なのかもしれない。



骨は5ミリ以下に粉末化される

発掘された人骨が博物館で展示されるまで

植田直見 財団法人元興寺文化財研究所主幹研究員

遺跡から発見される埋蔵文化財のなかに縄文時代から弥生時代の土壇墓とよばれる遺構から出土する人骨がある。人骨に対しては同じ出土遺物である木製品や金属製品と比べると自分たちの祖先という異なった感情が入る。そのため、近世など比較的新しい時代では研究が済むと再びもとのお墓に埋め戻されることも多い。しかし、縄文時代など古い時代の人骨は取り上げられ化学的に処理した後、博物館で展示される。今回、縄文時代の水分を含んだ状態で出土した人骨を中心に博物館で展示されるまでの過程を紹介する。

遺跡からの発掘・取り上げ

写真1は石川県能登町真脇遺跡三号土壇墓から出土した約四五〇〇年前の縄文人である。写真のように劣化が進み骨や歯のみが残った状態で、土圧により変形が見られる。頭部を北側にし、仰向けで足を曲げた状態（仰臥屈葬）でスギ板の上に安置されていた。成人で身長が一六〇センチメートルの大きな男性であることがわかっている。人骨は劣化状態によっては個々の部位がバラバラになり骨全体を単独で取り上げることが困難な場合がある。また、個々に取り上げるとどのように埋葬されていたかわからなくなるため、各部位の位置関係を



写真1 土ごと取り上げられた人骨(周りの色の薄い部分はウレタン樹脂)



写真2 お経をあげている風景(奥に見えるのが人骨)

そのままにして周りの土ごと取り上げる。

保存処理に入る前に

取り上げた人骨は薬剤などを含浸し強化処理をおこなうが、実際に作業をおこなう職員のなかには機械的に処理を進めるのにためらいを感じる者もいる。そのため、通常の遺物の保存処理ではおこなわないが、死者に対する弔いと作業者の気持ちの整理のために処理に入る前に元興寺の住職でもある当研究所理事長が人骨の前でお経をあげ、関係者は順次焼香する(写真2)。これによって作業者は安心して作業に取りかかれる。

保存処理

処理はまず付着している土を筆で丁寧に取り除く(写真3)。人骨はそのまま水分を蒸発させると土や骨にひびが入ったり崩れたりする。そのため、全体に出土木製品の処理などに用いられている平均分子量が約三〇〇〇のポリエチレングリコール(PEG)を染み込ませて強化する。PEG水溶液に土ごと漬けるが、そのままでは土や骨がバラバラになるため遺物全体を強化プラスチック(FRP)で覆った後(写真4)、低濃度から徐々に濃度を上昇させ完全に水とPEGを置換する。液から取り出し常温に戻すことで固化し強化する。最後に展示や保管が容易なように支持台を作製する(写真5)。これらの作業に一年以上費やす。そして、長い眠りから目覚めた人骨は多くの手を経てはじめて人前に姿を見せることになる。



写真3 表面の骨や木材のクリーニング



写真4 保護材の取り付け(上下からはさみ、針金で縛っている)



写真5 展示中の処理された人骨(周りの黒い部分が支持台)

骨が語るるとき

——ベトナムの遺骨探し

川越道子 大阪大学大学院招へい研究員

度重なる戦争の舞台となったベトナムには、戦火に果てた無名の人の骨が多く眠っている。戦死者やその遺骨の弔いが盛んになるのは、市場経済の導入や対外開放政策が推進されたドイモイ政策施行後の九〇年代半ば以降のことである。しかし、一口に「弔う」といっても、骨に対する思惑はそれぞれ大きく異なっている。



戦死者祭祀の中心地 チュオンソン烈士墓地の慰霊碑



無名墓も少なくない戦死者墓地

例えば、西洋の軍人墓地を模倣して造った近代的な戦死者墓地を国民国家統合の象徴としたい国家にとって、骨は国が祀るべき「英霊」である。他方で、死者への想いはもとより、病気や事故などの災厄を適切に供養していない先祖からの警告ととらえて遺骨を探しはじめる遺族にとって、骨は「族の手で弔うべき祖先の(霊魂)」である。今こそ遺族の要望に応じて関係当局も柔軟に対応していると聞

くが、当初は従来のしきたりに従い家で弔おうと戦死者墓地から骨を「盗む」遺族も続出したというのだから、両者の齟齬の大きさが計り知れよう。



兄弟の墓を探し出した遺族

またこの骨探し現象に拍車をかけたのが、超越した第六感で骨の所在を探し当てるといふ民間巫女たちの出現である。遺族にとっては、探そうにもまったく手がかりのなかった状況に光が射したわけだが、今度は、口寄せをおこなう巫女を介して、死者までもが骨の扱いに口を挟みはじめた。多くの場合、死者のことは国家と遺族との折り合いをつける役割を果たしていたが、国家、遺族、そして死者のあいだで、骨はますます宙に浮く。

とはいえ、やはり骨は遺された者たちの手中にあるのだろう。とある家族が精根尽くして探したしたのは、恐らく人骨かどうかさえ不確かな一片の灰色の塊だった。だが、家族はそれが求めていた骨でなくても構わないという。巫女の指示に従い、さまざまな徴候を辿ってやっと見つけた骨なのだから、これを大事に弔っていききたい、と。

骨探しは、単に弔いの過程なのではない。それは、「戦死」という紙一枚で強制的に終止符を打たれた息子や父たちの、中断された生の物語を改めて紡ぎなおす過程でもあるのだ。黙した骨が今もベトナムを覆っている。



自宅で戦死者の霊魂を弔う



研究フォーラム

国を超えるグローバルな支援と包摂

チェン ティエンシ
陳 天璽

民博 先端人類科学研究部

国際社会における情報化の進展にともない、国家間の境界も曖昧なものになっている。国という枠組に従い、当然の権利として認識されがちな「国籍」だが、その法制度の狭間には帰属すべき国籍をえられない「無国籍」の人びとが多くいる。ともに時代を生きる者として、無国籍者の現状と支援のあり方を見つめなおすシンポジウムを開催した。

国籍の構造への問い

オリンピックにしても、パスポートにしても、そして毎日見るニュースにしても、わたしたちが生きている社会、そして物事の考え方は、国家を基本的な単位としていることが多い。そのため、わたしたちは、誰でも国籍をもっていて当たり前だと思いがちである。世界人権宣言第十五条にも、「すべて人は、国籍を持つ権利を有する」とある。国籍がえられれば国民として選挙権や公務員としての職がえられるなど、さまざまな権利が与えられる。よって、国籍は「権利をえるための権利」であるといえる。国民国家が誕生してから、包摂と排除のシステムは「国籍」を基盤にすることが多くなった。国籍をもたない無国籍者はしばしば見過ごされ、国々の狭間に置き去りにされる。

国連難民高等弁務官事務所の推計によれば、現在、世界にはおよそ二二〇〇万人の無国籍者が存在すると報告されている。しかし、実際のところ、無国籍者については制度化された認定方法が整っていない。そのため、その人が無国籍であるか否かの判断はもとより、無国籍者の正確な人数を把握するのは難しいのが実状である。

市民と考える

二〇一二年二月二十七日、国際シンポジウム「世界における無国籍者の人権と支援」には、市民が無国籍、ひいては人と法の関係の実態を理解し、先入観や偏見をなくすることが肝要であると指摘された。

午後の国際シンポジウム「無国籍の認定と保護——国際比較と協力構築」では、フランス、タイ、日本から、各国の無国籍認定と保護システムの現状について発表がこなわれ、国際比較をおこなうことができ。さらに、国連難民高等弁務官事務所において難民・無国籍者を担当している法務補佐官、日本に在住するタイ出身ベトナム系無国籍者を支援する弁護士、そして日本生まれの無国籍者を交えて活発なディスカッションがおこなわれた。議論のなかから、日本の行政窓口の現場では無国籍問題に対応できる制度がないために担当者の判断にゆだねられている国籍認定の杜撰さが明らなみになった。現状を改善するため、早急に無国籍の認定制度が構築されるべきであると提案された。

国を超えた協力と包摂

シンポジウムが終了してから半月ほどたったころ、シンポジウムのパネリストたちのもとに一通のメールが届いた。日本に住む日本国籍の男性とタイに住む無国籍女性、そして二人のあいだに生まれた子に関する相談だ。男性と女性はタイで出会い結婚をしようとしたが、女性が無国籍であつ



戸籍のない娘を連れ身分登録に行く(映画『あなたなしでは生きていけない』より)

——日本の課題——がおこなわれた。前日二六日には、関連事業「みんなばくワールドシネマ」において、台湾を舞台に法的身分のない娘と父の深い絆を描いた映画『あなたなしでは生きていけない』を上映した。このように二日間をわたり、諸地域において無国籍の人びとがいかに暮らしているのか、どのような問題を抱えているのか、そして人と法律の関係性などに関して、映画とシンポジウムをおし理解を深め、新しい包摂と自律のあり方を、市民とともに考える機会をもった。映画を見た参加者からは、「法は人を守るためにも、排除するために

たため日本大使館に婚姻届を提出することができなかった。そのため二人の夫婦関係はもとより、父子関係が確認できず、男性と母子は日本とタイで離れ離れになっている。家族は日本で一緒に暮らすことを望んでいる。メールが届くと、パネリストを務めたタイと日本の実務家、研究者たちは、メールで頻繁にやり取りし、家族と一緒に暮らせるためにどのような手続きを進めるべきか情報共有、協働作業をおこなっている。国際シンポジウムをおしパネリストたちが築いた友情と信頼、問題意識の共有が国を越えた協力体制につながっている。今後は、こうした国を越えた支援をとおり、国籍の有無にかかわらず人びとが平等な人権を享受できる「国籍を超える包摂と自律」の新システムがいかに構築できるのかを考えていきたいと思っている。

国際シンポジウム

「世界における無国籍者の人権と支援

——日本の課題」2011年

実施日：2011年2月27日(日)

企画・代表：陳天璽

機関研究「包摂と自律の人間学」領域、プロジェクト「支援の人類学——グローバルな互恵性の構築に向けて」の一事業としておこなわれた。国際シンポジウムの関連事業として、前日26日「みんなばくワールドシネマ」において、血縁関係はあるが法的には父娘関係が証明できない父が娘のために法律や行政に体ひとつで対峙する実話を映画化した「あなたなしでは生きていけない」を上映。



通路まで参加者で埋め尽くされた

もあると感じた。「一人に平等に権利を与えない国家のゆくすえは、どうなるのでしょうか」などのコメントが寄せられた。二月二十七日、午前のプログラムである国際ワークショップ「無国籍者の支援の現場——市民社会からのアプローチ」では、無国籍者を支援するタイと日本の市民団体の実務家や無国籍者とともに、支援の現場の実態、当事者の生活や思いなどについて具体的な事例による報告がおこなわれた。タイでは無国籍者を登録状況によって細分化しているのに対し、日本では無国籍者の定義が曖昧であるという実態が浮き彫りとなった。また日本における在留資格のない無国籍者の困窮した日常やストレスの軽減

特別展

「ウメサオタダ才展」

みんなく初代館長・梅棹忠夫の軌跡をたどり未来をみつめる特別企画
日本などのような問題も、日本だけでは解決できない、そんな現代だからこそ、世界への知的好奇心は欠かせません。世界中にあるさまざまな感動を記録した、ウメサオタダ才の生涯を、みんなくで「探検」してください。そして、世界へのあくなき好奇心をお持ち帰りください。
会期 6月14日(火)まで
会場 特別展示館

◆関連イベント

◆企画展

「民族学者 梅棹忠夫の眼」
梅棹忠夫が、世界各地で自身が撮影した写真のなかから自ら46点を選び、国内各地で開催した写真展「民族学者 梅棹忠夫の眼」を再現します。
会期 6月14日(火)まで
会場 本館展示場内

みんなくウィークエンド・サロン

◆「民族学」 梅棹忠夫の眼」
みんなく名誉教授が梅棹先生の人物や研究についてお話しします。詳細は24ページをご覧ください。



◆「民族学」 梅棹忠夫の眼」
みんなく名誉教授が梅棹先生の人物や研究についてお話しします。詳細は24ページをご覧ください。



◆「民族学」 梅棹忠夫の眼」
みんなく名誉教授が梅棹先生の人物や研究についてお話しします。詳細は24ページをご覧ください。

どつぷりオセアニア——夏のみんぱく
フォーラム2011
面積のほとんどを海が占めるオセアニアの人々は西洋世界など出会うはるか前から、高度な航海技術をはじめとした独自の文化を育みながら生活してきました。その一端を、多彩なプログラムを通じて紹介します。
開催期間 6月19日(日)～8月21日(日)

◆研究公演

「フラを知る、フラを踊る」

日時 7月23日(土) 13時30分～15時45分
場所 講堂(定員450名) ※参加無料、要申込
申込締切 7月7日(木) 必着

◆研究公演

「カウア儀礼と天地創造のドラマ」

日時 7月30日(土) 14時～15時30分
場所 本館1階エントランスホール
※参加無料、申込不要

②解説「オセアニアの天地創造神話」

日時 7月31日(日) 13時30分～16時45分
場所 講堂(定員450名) ※参加無料、要申込
申込締切 7月14日(木) 必着

◆国際ワークショップ

「手話の歴史言語学データベースの構築と一般歴史言語学における展開を目指して」

世界で話されるさまざまな手話がどのように
往復はがきに住所氏名(返信用おともにも)・年齢・電話番号・参加人数(本人を含め4人まで)、「国立民族学博物館友の会」会員番号(会員のみ。維持会員および正会員のの方は優遇枠があります。)と研究公演タイトル・実施日を書いて広報企画室企画連携係までお申し込みください。応募者多数の場合は抽選となります。
※この他にも様々なイベントを予定しています。お楽しみに！
以上夏のみはみんなくウィークエンド・サロンのお問い合わせ
広報企画室 企画連携係
電話 06-6878-8210

友の会

友の会講演会(大阪)

会場 国立民族学博物館 第5セミナー室
定員 96名(当日先着順、会員証提示)

第397回 7月2日(土) 14時～15時
織フェルトの動物づくし
かれらはなぜつくり続けるのか?

講師 上羽陽子(国立民族学博物館助教)

東ネパールの女性たちは、織フェルトという技法で羊毛の動物をつくっています。織機など実物をお見せしながら、糸紡ぎ、製織、フェルト化までのさまざまな工程を紹介します。彼らの生活にとって動物づくりはどのような意味をもつのでしょうか。女性たちによる家畜飼育や日々の仕事についても考えてみます。

◆資料閲覧あり ◆
第398回 8月6日(土) 15時15分～16時15分
みんなくによみがえるオセアニアの文化

講師 須藤健一(国立民族学博物館長)

東京講演会

第98回 6月26日(日) 14時～15時

梅棹忠夫先生の学問世界

講師 松原正毅(国立民族学博物館名誉教授)
梅棹忠夫先生は、「幻視の行為者」としての人生を歩まれました。そのあゆみは、みごとくいつてよいものです。梅棹先生の学問世界をささえていた三つの要素は、持続力、越境力、発見力だともっています。今回の講演会では、この三つの要素を中心にお話したいと考えています。
会場 東京都中小企業会館講堂(銀座)
定員 130名(要申込)

「友の会」入会キャンペーン実施中

6月末までに新規ご入会の方にはオリジナルグッズを進呈しています。新規会員をご紹介くださった会員の方にもお贈りします。ぜひこの機会にご入会ください。

発達したのかを研究するためのワークショップを一般に公開します。(アメリカ手話・日本語・英語・日本語使用、同時通訳付き)
日時 7月28日(木) 8時30分～14時(予定)
場所 講堂(定員450名) ※参加無料、要申込
※わくわくはホームページをご覧ください。
http://www.minpaku.ac.jp/research/pr/10728.html
お問い合わせ
i:chi.shuwa@minpaku.ac.jp

◆国際シンポジウム

「アジア・太平洋地域諸言語の歴史研究の手法—日本語の起源は解明できるのか—」

日本やその周辺地域で話されることばの歴史については、まだわかっていないことがたくさんあります。研究者によるシンポジウムを一般の方にも聞いていただくよう、公開を行います。(英語、日本語への同時通訳付き)
日時 7月30日(土) 9時～18時
場所 講堂(450名) ※参加無料、要申込
※わくわくはホームページをご覧ください。
http://www.minpaku.ac.jp/research/pr/10730.html
お問い合わせ
i:chi.honggo@minpaku.ac.jp

音楽の祭日2011 in みんなく

1982年にフランスで、夏至の日にみんなくで音楽を楽しむ「音楽の祭典」がはじまりま

した。みんなくも、9年連続して世界のさまざまな楽器を使った音楽で「音楽の祭日」を祝います。
日時 6月26日(日) 10時15分～16時45分
場所 特別展示館1階および本館1階エントランスホール
※参加無料(当日は無料観覧日です)、申込不要
お問い合わせ
情報企画課 展示グループ
電話 06-6878-8532

●無料観覧日のお知らせ

6月26日(日)は本館展示を無料で観覧いただけます。ただし自然文化園を通行される場合は、入園料が必要です。

東日本大震災被災地に対する本館の取り組みについて

国立民族学博物館では、今回の災害に際しまして、地震等被災地の皆様へ、ご支援・ご協力していくため、様々な取り組みを進めております。一例として、4月16日(土)から当分の間、被災者支援の一助として、被災対象地の方(同伴の方を含む)が本館の展示を閲覧される場合は、お申し出により観覧料を免除することいたしました。観覧料の免除対象など詳細についてはホームページでご確認ください。

*お問い合わせの受付時間は9時から17時(土、日、祝を除く)です。

刊行物紹介

池谷和信・白水智 責任編集

『山と森の環境史』

文一総合出版 定価:4,200円
日本列島は、なぜ生物多様性が高いのか。人間の歴史と生物の歴史の両面から検討する。とりわけ、ここでは東北日本の山村の歴史を、自然の恵みの豊かさや脆弱さ、自然資源をめぐる人間社会の葛藤として示し、将来の方向を探る。



榎元真佐夫 著

『黒タイ年代記——「タイ・プー・サック」』

雄山閣 定価:6,510円
ベトナムに居住する少数民族、黒タイの村における民族学的調査と識者への聞き取りの成果に基づき、古い年代記「タイ・プー・サック」の内容を詳しく、平易に紹介した本です。



国立民族学博物館
ミュージアム・ショップ

電話 06-6876-3112
FAX 06-6876-0875
e-mail shop@senri-f.or.jp
水曜日定休

ウェブサイトもご覧ください。
オンラインショップ
「World Wide Bazaar」
http://www.senri-f.or.jp/shop/

ノクシカタの魅力

ノクシカタは、バングラディシユの伝統的な刺しゅうです。ベンガル語で「ノクシ」は「縫つ」、「カタ」は「布」を意味します。元々使い古したサリーなどを2～3層にして縫い合わせ、刺し子を施して布回力パーや肌かけにして再利用するというリサイクルの技術から生まれました。
バングラディシユの独立(1971年)後には、貧しい女性の収入を向上させるための仕事として、ノクシカタの商品作りがNGOによって始まりました。刺しゅうの模様には、ベンガル地方の自然や動物、生活の様子、そして人びとの思想が色濃く反映されています。



ハンカチ、ペンケース、小物入れ、ポーチ他 945円～
詳細はミュージアム・ショップにお尋ねください。

※他、クッションカバー、大型タペストリーなど多種ございます。

阪神淡路大震災の記憶をとどめる 野島断層保存館

くほまさとし
久保正敏 民博 文化資源研究センター



断層を保存する長い建屋

博物館には、記憶を次世代に伝える役割がある。集団で共有され物語として定形化された「歴史」に対して、個人が過去を自らの視点で理解し意味づけたものが「記憶」であり、そうした記憶を集積し、そこから過去を理解するための場を提供するのが、博物館の使命のひとつだとされる。

当時の姿をそのままに

今回の東日本大震災は、阪神淡路大震災の記憶を蘇らせる機会だった。災害や戦争の薄れていく記憶を再活性する場としての博物館のひとつに、淡路島旧北淡町の震災記念公園・



建屋のなかには140メートルの断層が展示されている

野島断層保存館がある。

長さ一〇キロメートルにわたり地表にあらわれた野島断層の多くは復興で痕跡は見えなくなったが、田畑のなかに建つこの施設には、横に最大二メートル、上下に最大一メートルずれた、長さ一四〇メートルにおよぶ断層が建屋で覆われて保存されている。断層自体が学術資料として貴重な天然記念物だ。表土を樹脂で固め、断層上にあつたためずれてしまった並木の列を枯らさない工夫など、原状保存の苦勞が偲ばれる。断層のすぐ脇に建っていた民家も、被災時の状態で保存され、過去を理解するための丁寧なガイドツアーがおこなわれている。

併設されているセミナーハウスでは、学習資料やセミナーを通じて、防災意識とともにコミュニケーションの絆の大切さも問いかける。北淡町では被災者の安否確認が速やかにおこなわれた点を踏まえたものだ。

次世代に伝える

生々しい現場の迫力は、人智のおよばぬ自然の力を示す。今回の東日本大震災では、おそらくこの数十倍



断層の脇にあった民家も保存されている

規模の断層が海底で動いたため、あれほどの大津波を引き起こしたのだと思うとぞっとする。あらためて人間には「防災」は不可能で「減災」を考えるしかないのだと思ひ知らされる。災害は繰り返されてはたまらない。しかし、それは必ずやってくる。この博物館入館者数の漸減が示すように、喉元過ぎればのことわざ通り、人は日常生活に紛れて記憶を呼び起こすのを忘れてしまう。その記憶を呼び起こし、如何にして次世代に伝えていくか、そのきっかけのひとつが、こうした博物館を訪れることなのだろう。

みんぱく 私の逸品 帆走カヌー チェチェエメ二号

標本番号 H0004975
地域 サタウル島
受入年 1975年

民博元外国人研究員

阮雲星

新しくなったオセアニア展示場には、引き続きチェチェエメ二号が展示されている。このカヌーの特徴でもある大きな三角形の帆は、「大鳥」の羽を連想させ、今にも飛び立とうとしているかのようだ。帆のない中国のカヌーに親しんできた私にとって、何故か懐かしく思えるのは、以前日本に滞在していたときから数年ぶりの邂逅を果たしたから、というだけではない。

カヌーは中国語で「独木舟」「皮划子」と表記され、古代の丸木舟や、タケでできた小型舟、あるいはスキンボートを指す。一方、帆船というと宋の時代以降に活躍した海商舟などの大型の船が思い浮かぶので、帆とカヌーは私にとって意外な取り合わせだった。

ある日、みんぱくで開かれた夏休みものづくりワークショップ「帆つきアウトリガーカヌーを作って帆走させよう」に参加した。そこでは「沖繩へ航海するチェチェエメ二号」が上映され、自身帆走カヌー航海の経験もある須藤館長が解説を加えた。なるほど「大鳥」に見えるのも不思議はない。チェチェエメ二号は太平洋を駆ける遠洋カヌーだったのだ。

その後、チェチェエメ二号に関する文献をとおして、伝統的航海技術や、関連する民話、さらにみんぱくに収められるまでの経緯をすることができた。

最近、中国においても文化遺産保護を目的とした博物館の建設がブームになっている。五〇年の歴史がある「福建省泉州海外交通史博物館」は、近年「中国の舟船世界」という展示場を新設し、約一六〇隻の実物・模型の舟船を常設展示している。昨年、国から認定されたばかりの浙江省「ナショナル海洋漁文化(象山)文化生態保護(実験)エリア」でも、現在所蔵の木造船帆模型とともに、消えつつある遠洋帆船作り技術や伝統的航海術の記録保存や、「舟船文化博物館」の建設などが計画されている。これらの計画をすすめるうえで、舟の収蔵と展示、異文化理解と研究、研究者と来館者の関係などの点で、みんぱくのチェチェエメ二号がさまざまな示唆を与えるかもしれない。

チェチェエメ二号が懐かしく思えたのは、おそらく私が、絶えず探検の夢に巡り会いたいと願っているからだ。「地球村」とも表現される現代は、異文化同士の「邂逅」がより頻繁に起きる知的探検の時代である。私にとってチェチェエメ二号は、今にも知的探検に飛び立とうと羽ばたく美しい姿に見えてくるのだ。





ハワイ、沖縄、フィリピンの 歴史が交錯する街

原知章
はら ともあき
静岡大学准教授

ハワイ・オアフ島のホノルル国際空港から西に向かつて一五キロほど車で走ると、ワイパフという街に到着する。この街の一角にある「ハワイ沖繩センター」と「フィリピン・コミュニティセンター」というふたつの施設を訪ねた。

砂糖が王様だったころ

ハワイの島々は、どの大陸からも遠く離れた北太平洋の中央に位置しており、世界でもっとも孤立した地域のひとつである。そのハワイに、一九世紀後半から二〇世紀前半にかけて、日本人をはじめ多くの人がびとが世界各地から移り住んだ。それは、地元の人びとの表現を借りるならば、当時「砂糖が王様だった」からだ。戦前まで、ハワイ経済を支えていたのは砂糖産業であり、世界各地から集まった人びとがその生産に携わっていた。オアフ島にも、かつてはサトウキビの大規模な農園が広がっており、砂糖工場を中心とした街が各地に作られていた。こうした砂糖プランテーション・タウンのひとつがワイパフである。しかし、もはやこの島で砂糖プランテーションの姿を見ることができない。ただ、ワイパフの街には、かつての砂糖工場の煙突が今なお空高くそびえており、砂糖が王様だったころの面影を残している。

ハワイ最大のエスニック・フェスティバル

太平洋戦争が始まる直前のハワイでは、人口の四割を日系人が占めていた。沖縄は、多くのハワイ移民を輩出した地域のひとつであり、戦前のワイパフにも、大勢の沖縄系の人びとが暮らしていた。

同地に、ハワイ沖繩センターが建てられたのは一九九〇年のことである。沖繩式の赤瓦を戴いたふたつの建物と美しい庭園からなるハワイ沖繩センターには、沖繩県人会に相当する「ハワイ沖繩連合会」という団体の事務局がある。事務局にはスタッフが常駐しており、沖縄の歴史・文化や移民などに関する書籍や展示物が並んでいる。サンシン（三線）やウチナーグチ（沖繩語）の教室も開かれている。ハワイ沖繩連合会の主催によって、毎年九月ごろにワイキキのカピオラニ公園で開催されるオキナワン・フェスティバルには、二日間の会期中に六万人もの人びとが訪れ、現在ではハワイ最大のエスニック・フェスティバルといわれている。

成長するフィリピン系コミュニティ

ハワイでは、オキナワン・フェスティバル以外にも、さまざまなエスニック・フェスティバルを見ることができ、そのひとつがフィリピン・フィエスタである。会場はオキナワン・フェスティバルと同じカピオラニ公園である。こちらは、フィリピン・コミュニティセンターの主催により、毎年五月に開催されている。そのセンターの事務局は、ハワイ沖繩センターから五キロほど離れた距離に位置する、瀟洒なコロニアル建築が目を引き真新しい建物のなかにある。ここでも「バンダ・カワヤン」とよばれる竹を使った伝統楽器の合奏の教室などが開かれている。二〇世紀初頭から始まったフィリピンからハワイへの移民の流れは、現在もお続いている。多様な人種・民族的背景をもつ人びとが暮らし、「どのグループもマイノリティ」といわれるハワイにおいて、フィリピン系の人びとは、大きな勢力となりつつある。今日、ワイパフの街でもっともよく見かけるのもフィリピン系の人びとである。沖縄系の人びとははじめ日系人の多くは、戦後、社会経済的地位の向上をとげ、プランテーション・タウンから郊外の新興住宅地へと移り住んでいった。その後も、かつてプランテーション・タウンがあった場所にとどまり、あるいはニューカマーとして多くやってきたのが、フィリピン系の人びとだった。

故郷を想い、ハワイを想う

ハワイ、沖縄、フィリピン——この三つの地域には、単に南国の島々というだけではなく、モノカルチャー的な熱帯農業が基幹産業になったこと、大規模な戦争の舞台になったこと、そしてアメリカの統治下におかれたことなど、さまざまな共通点を見出すことができる。ワイパフは、この三つの地域の歴史が交錯する街であり、変わりゆくハワイ社会の姿の一端を鮮やかに映し出している街でもある。この街で、沖縄やフィリピンの文化を継承しようとする人びとの営みには、遠く離れた故郷への想い、砂糖プランテーションで懸命に働いた祖父母たちへの想い、そして、多様なエスニック集団と文化が共存するハワイへの想いが重なり合っている。



オキナワン・フェスティバルではさまざまな団体が音楽・舞踊、あるいは空手の演武などのパフォーマンスを繰り広げる



フィリピン・フィエスタの会場には、軽食や飲み物を買うことができるブースが立ち並び、大勢の人でにぎわう



現在もワイパフの街に残る砂糖工場跡

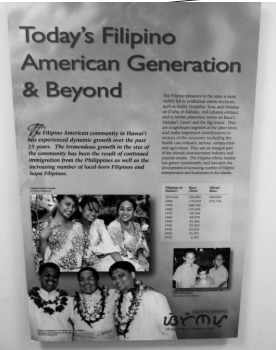


ハワイ沖繩センターの建物のひとつ。沖縄に関連するさまざまなイベントやパーティが開催される



瀟洒なコロニアル建築が目を引きフィリピン・コミュニティセンター

建物のなかには、フィリピンからハワイへの移民が始まってから100周年を記念した際のパネルが並んでいた



「やっぱり、韓国語が混じるんですよ。途中で重要な単語が韓国語であつたりするとこつちが、勝手に解釈してしまつたりして困るんです。」

これは在日コリアン認知症高齢者施設で介護支援者から聞いたことばである。事実、いまままで日本語を不自由なく使っていた人も老うにつれ次第に日本語をわすれ韓国語へシフトしはじめる場合が多いという。ことばだけではない。習慣も食事もしつきの好みも泉のごとくわかあがつてきて、周囲の人と文化的摩擦が生じがちなようだ。

高齢化するコリアン二世の介護施設

日本の朝鮮半島植民地支配に由来する在日コリアンの歴史は一〇〇年にもおよぶ。第二次世界大戦期来日したコリアンの子孫が四、五世にまで世代をかさねる一方、本国で幼少期をすごしたあと日本で辛苦にたえ生き抜いてきた当の一世は高齢期を迎えている。日本人にくらべ、家族の絆の強いコリアン社会においても、核家族化、伴侶との死別、子どもの転勤などで一人暮らしを余儀なくされる高齢者が増えつつある。しかし故郷に帰るに帰れないコリアン二世にとって、家庭以外で同胞同士が安心して生活できる環境を補償することは容易ではなかった。

一九八〇年代後半、在日高齢者の孤独死が相次いでいた。異国で迎えた人生最後の時間を安らかに過ごしてもらいたいと、尹基氏（現・社会福祉法人こころの家族理事長）が朝日新聞に寄稿した韓国人専用の老人ホーム設立の訴えが注目をよんだ。文化人や福祉専門家たちの協力のもと韓日を用いることの少ないコリアン入居者にとっては楽しい時間である。そのため、日本のケアワーカーたちは、韓国からの研修生を貴重な存在として捉えている。

一方で、「故郷の家」は地域とのつながりも重視している。コリアンデーをもうけ、地域の方々に「故郷の家」や韓国文化に触れてもらう機会を提供しており、韓国の食べ物販売や、韓国の伝統芸術の公演、民族衣装の試着等、文化交流を図っている。そのうえ、暮らしのなかに「オンドルと畳、アリランと演歌、キムチと梅干」など、韓国と日本の文化を取り入れ、どちらにも対応できるのは「故郷の家」ならではの特徴であるといえる。

その後もこのような在日コリアン高齢者向け老人ホームは増え続けている。尹理事長はその後、一九九四年から二〇〇九年にかけて老人ホームのほか、介護サポートセンターやケアハウスを大阪、神戸、京都に次々と開設し、在日コリアンの文化に配慮しつつ、在日コリアンと日本人の共生ホームとして運営している。今度の目標は、「故郷の家・東京」の建設だという。

在日外国人の高齢者施設のモデルとして

二〇〇九年四月に、「故郷の家・京都」が竣工した。これはケアハウスも併設している。ケアハウスには、特別養護老人ホームに入居する人より比較的健康的な人が多い。ドラマのように幼いころ近所に住んでいた人と偶然にケアハウスで再会する在日コリアン入居者を何人か目に

多文化を
ささえる
人びと

母語で喜怒哀楽を 文化的背景に配慮した 在日コリアン老人ホーム「故郷の家」

「故郷の家」は、おもに在日コリアン二世のために、日本社会で老いを迎えるための老人ホームとして、馴染み育ったことば、文化や食生活を提供している。

異なる文化的・社会的環境のなかでエスニックな文化的背景に配慮しようとする高齢者介護からの学びは大きい。

キム チュンナム
金 春男

大阪府立大学プロジェクト研究教員



毎日の食事は韓日のおいしいメニューがいっぱい。キムチ・梅干しはかかせない



開かれたホームとして、家族と一緒に母の日のおやつバイキング



定期的に来日する韓国からのボランティアたちとの交流。韓国アカデミー少年少女合唱団の子どもたちと風船遊び（故郷の家・京都にて）

※写真提供・故郷の家

両国から寄付が集まり、一九八九年一〇月、堺市に最初の在日コリアンのための老人ホーム「故郷の家（定員八〇名）」が開設された。

筆者は一三年前韓国より来日し、在日コリアンの高齢者施設における介護支援についての研究をおこなうなかで、ソーシヤルワーカーとして「故郷の家」で働きながら、その実情をつぶさにみてきた。そこで実感したのは、単なる物質的環境、身体的介護ではなく、高齢者の安らぎにとってはおおつて親しんだ文化環境がいかに大切であるかということであった。

高齢者の安らぎをささえる文化的ケア

「故郷の家」では、韓国食を提供し、韓国語ではなしたい高齢者にはできるだけ韓国語ではなしかける。文化を配慮したプログラムとして故郷の生活を再現するための年中行事も盛り沢山だ。毎月の誕生会で職員たちが韓服を着て、韓国の挨拶（クンジョル・両手の甲をおでこにあてて、ひざをつき頭を下げるおじぎ）をすると、「日本に来て初めてこのようにしてもらってとてもうれしい！」と感動の涙を流す場面をよく目にする。このようなお年寄りの感謝のことばで職員たちは逆にやる気や生きがいを感じるのと口を揃える。

この点、特に、韓国からの研修生は、日本のケアワーカーたちの目が行き届かないところを補ってくれる存在である。例えば、夕食のひととき、在日コリアン入居者と研修生がゆっくりと会話ができる時間をもうけており、普段母語

したことがある。一緒に笑ったり、怒ったりしながら共に生きる喜びを感じつつ歳をとっていく在日コリアンがここにいる。

母国と離れて生活する人びとにとって、個人や家族の支援はもちろん、社会的および公的制度の支援は不可欠である。常に相談に応じしてくれる人、母語や文化が理解できるソーシヤルワーカーの存在は重要である。日本のソーシヤルワーク教育において、外国出身者への文化的配慮や異文化理解を通じた対処できる能力向上のためプログラムは、まだあまりおこなわれていない。保健・医療・福祉専門職者たちはもちろん、国および地方自治体レベルでの多文化サービスを施策として充実させていくことは課題のひとつであろう。さらに施設サービスの新しいあり方が問われる今日、外国出身の高齢者を対象とする福祉サービスの再考は必要であろう。

今日、日本の外国人登録者は二二〇万人にも上るといえる。日本国籍を取得した人も含めれば外国出身者はさらに二、三〇万人はふえよう。一九八〇年代以降来日した中国帰国者、インドシナ難民のなかにもそろそろ高齢期に達する人びとがあらわれることを考えると、移民グループごとの介護やケアの必要性はけつしてコリアンだけの問題ではない。すでに二〇年もの歴史をへて、在日コリアン高齢者を対象として運営されてきた「故郷の家」の経験は、今後解決すべき課題もふくめ、これからの日本社会に多くの学びを提供してくれるであろう。

「故郷の家」 <http://www.kokorono.or.jp>

モンゴルのナーダム

モンゴルのスポーツ祭典ナーダムでは、古式ゆかしい鮮やかな衣装をまとった人びとが草原にあつまると、さまざま歴史の変遷、政治のうつり変わりをへてもなお、伝統を受け継ぐスポーツがわれわれにしめすものは……。

歴史をとりこぼさず

モンゴルのおまつりといえは、ナーダム。夏のスポーツ祭典である。一般的な「遊び」という意味をもつモンゴル語であるけれども、モンゴル人のあいだでは国籍をとわず、スポーツ祭典をさしていることが多い。モンゴル国では、七月一日の革命記念日にちなんで、この前後に全国各地でナーダムがおこなわれる。首都ウランバートルでは、国家的祭典として七月一日から三日まで実施される。一九九二年に新しい憲法が制定され、社会主義に終止符がうたれたものの、社会主義革命記念日はそのまま採用されている。夏ま

つりの時期として適切であることが歴史を超越するのだから。かつて社会主義時代には、スタジアムでマスケームがおこなわれていた。梅棹忠夫のこした写真コレクション三万五〇〇〇点のなかに、一九八二年にモンゴルを訪問した際の写真もあり、マスケームなど、今ではもうみられなくなった社会主義時代に特有のナーダムの風景がとどめられている。民主化直後には、マスケームにかわって、中世の騎馬軍団をおもわせるようなアトラクションがくわわった。とりわけ二〇〇六年は、モンゴル建国八〇〇周年と称して、盛大なもおしものがあった。八〇〇年前には、かのチンギスハンが諸部族を

統一し、ハーンの称号をえた。そこから数える歴史というのは、近代国家の具体的な成立過程をとりこえた、民族感情のあらわれである。このように、おまつりの意味づけは歴史を反映して変化する。そもそも社会主義革命以前には、チベット仏教の指導者である活仏の長寿を祈願する祭典として実施されていたから、政治性をおびているという点ではむしろ一貫している、とみるべきかもしれない。

歴史をくぐりぬける

まつりにつきものの「三つの競技」は基本的には民主化の前後で変わら

ない。すもうと競馬と弓射である。これらが三点セットである点については、伝統的にそうだったのか、近代的な整備によるのか、検討の余地がある。というのも、全国各地で実施される地方版ナーダムでは弓射があまりみられず、さかんにおこなわれるアルタイ地方、たとえばウリヤンハイ族たちのあいだでは、もっぱら冬のスポーツとしてたしなまれてきたからである。狩猟儀礼と密接な関係をもっていたのかもしれない。すもうと競馬の二点セットにかぎると、モンゴル国各地でみられるほか、国境をこえて中国内蒙古自治区でも同様にみうけられる。中国の場合も、おまつりは政治的な変動をくぐりぬ

けてきた。文化大革命中は、民族的な行事として禁止され、一九七〇年代後半になってゆつくりと復活した。現在では、地方活性化とりわけ観光化の核としてオボ（塚）まつりが復活し、その際の奉納競技としてナーダムが開催されている。

過去を踏襲する

写真は、一九八八年六月二〇日シリント市内にあるオボのおまつりのとき。旧暦の五月八日ごろにおこなわれる雨乞いの儀礼で、競馬とすもうが奉納された。

当時はまだ草原に電線がくまなく引かれていなかったし、太陽光発電も風力発電もさほど普及していなかった。太陽がしずめば暗く、月こそがもっとも美しい照明である。満月は、今日か明日か、微妙に判定しにくいにくらべて、半月のほうがわかりやすい。旧暦五月の、半月のころは、草原にとって雨の到来時期にあたる。人びとは、オボにあつまり、おそなえものをし、僧たちがお経をあげると、ちょうど雨がふりはじめ。この日は雲ひとつない快晴で、あいにく雨の恵はなかったけれど、人びとはおおいに楽しんだ。女性たちは草原に映えるあざやかな色の衣装を着て、すもうを見学する。力士たちの衣装もまたあざやか

未来へ展開する

このように衣装や流儀は異なっても、すもうというスポーツは日本を越えて中国、韓国、モンゴルそしてさらにユーラシア全域へと広がっている。たとえば、先述の梅棹写真コレクションのなかに、一九五五年、アフガニスタンのタイワラで遭遇した、イギリス軍からの独立記念日のまつりの写真が数点ある。広い空間に人びとがどうこうでアリーナができあがり、すもう会場となっているさまは、まったくモンゴル草原と同じである。そんなふうにもともと、すもうというものは世界に展開してきた伝統的なスポーツなのである。その世界性に思いを致すなら、国技だという偏狭な思い込みから自由になれるのではないだろうか。陋習を捨てて、世界に開かれたスポーツに生まれ変わる道も開かれるのではないだろうか。



大地を飛ぶように四肢を踏む、内モンゴルの力士たち(1988年、中国内蒙古自治区シリント市)



漁業開発が残したもの

よしむら けんじ
吉村 健司
総合研究大学院大学博士後期課程

ジャルートの生活

マーシャル諸島共和国のジャルート環礁は首都のマジロから二五〇キロメートル南西に位置する。週二回往復する飛行機が、首都と接触する唯一の機会だ。必ずしも安定的な稼働はおこなわれていないが、発電システムや燃料備蓄基地といったインフラが整備されている、マーシャル諸島では数少ない地域である。

これまで、マーシャル諸島では日本が主体となった漁業開発が二〇件おこなわれてきた。そのうちのひとつが二〇〇〇年に国際協力事業団（現在の国際協力機構）によって実施された、「ジャルート環礁漁村開発計画」である。ジャルート環礁においてはじめておこなわれた漁業開発である。

では、漁業開発の目的とは一体どういうものなのか。簡単にいえば、「生業漁業から商業漁業への転換を図る」ことである。そこでは、あらたに効率的な漁具や機材を導入することで漁業機会を向上させ、その目的達成を図る。漁業開発の成果を判断する指標のひとつに、住民の現金獲得パターンがあげられる。統計に



上空からみたジャルート環礁



漁業開発で作られた漁獲物集荷基地

ボートを動かすことができない状態にあった。燃料を積んだタンカーは定期的に来ず、燃料切れは、しばしば起こるといふ。そして、調査を進めていくなかで、漁業開発で導入された、冷蔵庫などの機材の多くは、故障中であることもわかった。しかも、冷蔵庫は魚の保存に使われることすらなかった。日本によっておこなわれた漁業開発だが、現在残っているのは事務所と故障した機材だけで、漁業開発は実質、破綻している状態であった。調査中、偶然にも現地の新聞に、「稼働ボートなし、漁獲なし」という見出しで、この状況が取り上げられていた。

今でも駆使される多様な漁法

では、彼らがまったく漁に出なくなっただかといえ、そうではない。ジャルートでは、トゥーロン（鉛突漁）やココソコエクジエク（ラグーン内での曳釣漁）、イララック（ラグーン外での曳釣漁）、レムウイオ（多人数による追込漁）、ウク・アエトク（長網漁）、ウロック（ラグーン内でのカヌー漁）の六種を中心に、全部で五九種類の漁法が今でも存在している。一方、漁業開発の成功地域として知られるアルノ環礁では七種しか確認されなかった。アルノ環礁と比較してみるとジャルートでの漁法数は、まさに驚きである。ジャルートでは、今でも伝統的な漁具や漁法を用いる漁業文化が根づいていることを実感した。

海への信頼

首都との接触の機会が少ないジャルートでは、定期的な鮮魚の運搬や、機材等の修理が難しく、故障した機材は放置される。このため、あらたな漁具や機材の導入は漁業機会の向上には結びつかない。その結果、漁業開発の目的を達成することは困難になる。

そもそも、ジャルートにおいて漁業開発は必要だったのだろうか。調査中、現地の老人たちは口をそろえて「わたしたちには海がある。お金なんていらぬのさ。必要なものがあれば魚と交換すればいい。お金に執着することは愚かなことだよ」と語る。なかには、語気を強めていう人もいた。このことばは「海があれば生きていける」という、海に対する信頼のあらわれでもある。さらに、語気を強めたその背景には、開発によって自分たちの生活が弄ばれた怒りすら感じ取られた。ジャルートでの漁業開発は、生業漁業から商業漁業への転換という点では、失敗に終わったといえるだろう。しかし、開発の失敗が残したのは、故障した機材だけではない。ジャルートの人びとは、その失敗を乗り越えて海に対する信頼を再認識したのである。彼らは自分たちが従来駆使してきた漁法を巧みに操ることで、現在を生き抜いている。そんな姿に、彼らの逞しさを感ずる。

4 Friday, September 17, 2010 — The Marshall Islands Journal

No working boats, no fish

Nine motorboats on land not working. A fish freezer broke for more than a year. That is the state of the Jalut fish base on Jalut Island, say local fishermen and political leaders.

The Marshall Islands Marine Resources Authority (MIMRA) was criticized by the Jalut Auli Fisheries Federation for what they call a "total failure" in its management and operation of the fish base at the southern atoll.

Local officials — and Jalut senators — contend that the facility and the fishing boats have not been operational for more than a year. The fishing group said that if MIMRA trained local fishermen to maintain the freezer and boat engines, "they would not have to wait for years for MIMRA to send someone to fix such major problems."

But they also describe what may be a bigger problem than broken down boats and freezers that lack maintenance: The fishing federation is questioning MIMRA's commitment to sustainable development of marine resources.

"If they had such interest, they would have required catch reports from the fishermen for data collection and also promote deep bottom fishing to relieve pressure on the limited coastal resources," the organization said in a statement provided to the Journal.

According to Kanj Mōjōng, one of the officers of the organization, "It is fortunate that the fishermen, their traditional leaders and the local government had taken the initiative to reactivate the base."

"We're going to establish a HAACP (Hazard Analysis and Critical Control Point) protocol governing food imports to the United States. If we get this in place, we hope to get into outside markets (for RMI fish)," he said.

This will "increase the value of the fish" by selling them in an overseas market, he said. Increasing the revenue generated through fish sales to the US can help to fund the base's operation, according to the Marshall Islands Marine Resources Authority. MIMRA fish market Manager Fred Bukida said an official from the Overseas Fisheries Cooperation Foundation in Japan arrived in Majuro last week, with plans to join with a MIMRA staff on a visit to Jalut for a few days this week to inspect the fish base that OFCF has funded since its inception.

"We've ordered a new ice machine, and we're awaiting funding for the parts to repair boat engines," Bukida said. He expects improvements to Jalut facilities and boats to happen later this year.

Team goes to Jalut

Fisheries officials were planning to head to Jalut this week to survey fish base operation, according to the Marshall Islands Marine Resources Authority. MIMRA fish market Manager Fred Bukida said an official from the Overseas Fisheries Cooperation Foundation in Japan arrived in Majuro last week, with plans to join with a MIMRA staff on a visit to Jalut for a few days this week to inspect the fish base that OFCF has funded since its inception.

The boat "graveyard" at Jalut fish base. Inset: MIMRA's Fred Bukida.

Exports to the US?

The opening of the Japan-funded Majuro Fish Market next year could lead to the first international export of locally-caught reef and bottom fish to the United States by the Marshall Islands Marine Resources Authority, said Fish Market Manager Fred Bukida.

"We're going to establish a HAACP (Hazard Analysis and Critical Control Point) protocol governing food imports to the United States. If we get this in place, we hope to get into outside markets (for RMI fish)," he said.

This will "increase the value of the fish" by selling them in an overseas market, he said. Increasing the revenue generated through fish sales to the US can help to fund the base's operation, according to the Marshall Islands Marine Resources Authority. MIMRA fish market Manager Fred Bukida said an official from the Overseas Fisheries Cooperation Foundation in Japan arrived in Majuro last week, with plans to join with a MIMRA staff on a visit to Jalut for a few days this week to inspect the fish base that OFCF has funded since its inception.

"We've ordered a new ice machine, and we're awaiting funding for the parts to repair boat engines," Bukida said. He expects improvements to Jalut facilities and boats to happen later this year.

ジャルートの漁業が休業状態にあることを報道する現地紙(2010年9月17日)



トゥーロンを終え岸上がった男性

6月

みんなくウィークエンド・サロン

研究者と話そう

■時間 14時30分から15時30分

■展示観覧料が必要です。

※都合により、予定を変更することがあります。

国立民族学博物館（みんなく）の研究者が来館された皆様の前に登場します！「研究について」「調査している地域（国）の最新情報」「展示資料について」などなど、話題や内容は千差万別！

どんどん質問もおよせください。展示場でお待ちしております。

※特別展開催中のウィークエンド・サロンでは13回にわたりみんなくの名誉教授が初代館長・梅棹忠夫についてお話しします。

5日
(11月11日)

話者：祖父江孝男（国立民族学博物館 名誉教授）

話題：【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】

梅棹さんと私一出会いから民博草創期まで

場所：特別展示館

12日
(11月18日)

話者：杉田繁治（国立民族学博物館 名誉教授）

話題：【特別展「ウメサオ タダオ展」関連】

梅棹流 知のマジック

場所：特別展示館

※夏みんなくフォーラム期間中はオセアニアに関するお話をお届けします。

19日
(11月25日)

話者：小林繁樹（国立民族学博物館 教授）

話題：【「どっぷりオセアニア——夏みんなくフォーラム 2011」関連】

クラ交易の記憶をとどめる歴史資料

場所：本館展示場内オセアニア展示場

1年間みんなくに何度でも入館できる 「みんなくフリーパス(3,000円)」をご利用ください。

本館展示は何度でも無料で入館できます。他にも、みんなくを楽しむための特典がいっぱいです。

- ◆特典◆本館展示の無料入館◆特別展示の観覧料割引
- ◆みんなくミュージアム・ショップとレストランの10%割引
- ◆万博記念公園内および周辺施設での利用割引 など。

詳細については、財団法人千里文化財団までお問い合わせください。
(電話06-6877-8893 / 平日9:00 ~ 17:00)

編集後記

あたらしくなったアメリカ展示で引き続き展示されている骸骨人形にことよせて今号で特集した骨は、生命維持に必要なミネラルの貯蔵と調節の機能をもつ、体内の「海」だ。海を携えたおかげで陸へ進出した脊椎動物は、体を保護する外骨格の代わりに内骨格を発達させて、重力に抗する大型の体をえた。ヒトの場合、頭蓋骨は外骨格の名残だという。重要な脳を守るのに有利だったため最後まで残ったのだろうか。外骨格であるゆえ頭蓋骨から顔つきを想起しやすく、だからこそ、頭蓋骨は特定の故人と強く結びつくのだろう。頭蓋骨に限らず、没後も残る硬い骨は、個人情報の集積であると同時に、故人を偲ぶやすがであるのは、特集の各論が述べるとおりだ。

いや骨だけではない、写真、書き物、愛用した品、たったひとつでも良い、残されたモノや記録から紡がれる思いや記憶のなかに、亡くなった方々は生き続ける。少しでもその役に立つこと、これもまた、博物館や図書館、資料館の重要な役割だとあらためて思う。(久保正敏)

●表紙：骸骨人形（死神の音楽隊：バイオリン、ギター、ハーブ）
標本番号 H0131684, H0131685, H0131686

次号の予告

特集

海とともにいきる あたらしくなったオセアニア展示

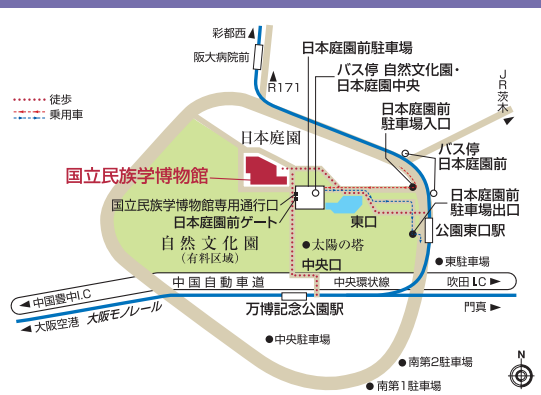
月刊みんなく 2011年6月号

第35巻第6号通巻第405号 2011年6月1日発行

編集・発行 人間文化研究機構 国立民族学博物館
〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園 10-1
電話 06-6876-2151

発行人 八杉佳穂
編集委員 久保正敏（編集長） 朝倉敏夫 櫻永真佐夫
庄司博史 中牧弘允 山中由里子
編集アドバイザー 山内直樹
デザイン 宮谷一孝
制作・協力 財団法人 千里文化財団
印刷 日本写真印刷株式会社

*本誌についてのお問い合わせは国立民族学博物館広報係に
お願いします。
*本誌掲載記事の無断転載を禁じます。



交通案内

- 大阪モノレール「万博記念公園駅」・「公園東口駅」下車、徒歩約15分
- 阪急茨木市駅・JR茨木駅・北大阪急行千里中央駅からバスで「日本庭園前」下車、徒歩約15分（茨木方面からは、もっとも近い「自然文化園・日本庭園中央」バス停で下車できるバスが1時間に1本程度あります。詳しくは阪急バスにお問い合わせください。）
- 自家用車は、公園内の「日本庭園前駐車場」(有料) から徒歩約5分。「日本庭園前ゲート」横にある民博専用通行口をお通りください。
- タクシーは、万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてできます。



みんなくホームページ

<http://www.minpaku.ac.jp/>

